
仮面ライダー × バトルロワイヤル = 終焉！？

充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×バトルロワイヤルⅡ終焉！？

【Nコード】

N6667W

【作者名】

充

【あらすじ】

主人公の宮村遼は、普通の人生を送っている高校生。しかし、『神様』の気まぐれにより始まったバトルロワイヤルに巻き込まれていき、宮村遼の人生は変わり始める。

プロローグ（前書き）

よろしく願います！

プロローグ

『今から、貴様ら人間にはバトルロワイヤルをやってもらっ』

そう言い放ったのは、大体20歳ぐらいの青年。

髪の毛はショートで色は金髪。

服装は、なぜか黒のロングコートだった。

『かといって、地球全員の人間がこのバトルロワイヤルに参加するんじゃない。』

そう言つと、青年は一息つきながら言う。

『運が、悪いやつ、が参加するんだ』

青年は椅子を見つけ、そこに座る。

『しかし、普通のバトルロワイヤルじゃ、面白さがたりねえ』

その金髪の青年は、そういうながら右手を上にする。

すると、右手からは沢山の光が現れると、その光はどこかへと飛び散っていった。

『普通のバトルロワイヤルじゃ面白くねえからな。神様からのプレゼントってやつだ。ありがたく頂戴しやがれ、貴様ら……まあ、プレゼントだけじゃねえがな』

そう言つと、神様と名乗った青年の姿が薄くなって行く。

『あ、そうそう。言い忘れてたが、最後まで生き残つてたやつには願いを何でも叶えてやる。……まあ、生き残れたら、だがな』

最後に神様はそう付け加えて姿を消していった。

「——きろ！」

「んん……」

「起きろ、宮村！」

「……はい……」

「お前、今は何の時間だと思ってるんだ？」

「……こ、古典です」

「分かっているじゃないか」

「ありがとうございます」

「よし、放課後に職員室に来い！」

「はい……」

宮村は、古典の先生に謝るとその後しっかりと授業を受けた。

怒られた遼は、その事をあんまり気にせずさっきの夢の事について考えてみた。

（……さっきの夢って一体何なんだ？）

と、考えていると、授業を終了するチャイムが鳴った。

「よし、今日はここまで。委員長」

「起立、礼」

『ありがとうございます』

クラスの生徒はそう言っ、昼休みに入っていた。

「よ、遼。さっきはドンマイだったな」

「うっせえよ」

遼と呼ばれたこの少年は、みやむら宮村 りょう遼という。

背丈は180cmぐらいで、髪は男子にしては少し長いほつで黒色。

……180cmで高校一年生って、どうなの？

「うっせえよー！」

「何も言ってないんだけど……」

「き、気にするな」

「まあ、良いけどよ。さっ、飯食べようぜ」

「そうだな……って、明」

「ん？」

「彼女は良いの？」

「あっ」

遼が明と言う、身長170cmぐらいで髪は少し茶色かったシ

ヨートヘアーの少年に言うと、明は「忘れてた！」って感じの顔を
した。

「はぁ、行って来いよな、リア充めが！」

「おう！」

明はそう返事をしてから、教室を走り去った。

「……違うやつと飯を喰うか」

そう呟くと、遼は違うグループと一緒に飯を食べるために、席を
移動する。

しかし、その瞬間に大きな地震が起こった。

「じ、地震だぁぁぁぁあつ！」

「け、結構大きいぞ!？」

「と、とりあえずしゃがめええええええええ!!」

クラスにいた一人がそう言うのと、クラス全員がその場にしゃがみ
こむ。

そして、少しすると地震が収まる。

が、地震が収まると、「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」や、「助け
てええええええええ!」など、近くから悲鳴が聞こえてくる。

「……おい、どうなってるんだ!？」

「俺が知るかよ!」

「私も知らないわよ!」

「とりあえず、俺は学校を出る!!」

「俺も!」

「私も!」

と、クラスにいる生徒がどんどん教室を出て行く。

勿論、そこには遼もいたが、遼は教室の隅にある変な、ケース
を見つけた。

「……なんだこれ？」

そう言いながら遼はそのケースに近寄るとその中身を少しためら
って開けた。

そこには、3枚のメダルとそのメダルを入れる入れ物のようなも

のと――

「……………ベルト？」

そのベルトを持つと、遼の脳内に声が響く。

『お前は、バトルロワイヤル――ライダー戦争への参加が決定した』

「ッ!？」

『ふっ、まあ精々生き残るんだな』

「ま、待て!」

『……………』

もう遼の頭の中には、言葉が響いてこなかった。

こうして、宮村遼の人生は変わり始めた。

プロローグ（後書き）

感想、待ってマース！

第一幕

（これは……どうしたら良いんだ！？）

遼は、あれから右手に長方形ぐらいで3つの穴が空いた、ベルトと言うには小さ過ぎるものを持ちつつ、少し考え込んでいた。

（何だよ、ライダー戦争って！　そもそもライダーって何だよ！）

そう。この世界には『ライダー』と言う単語はバイクに乗っている人を稀に呼ぶぐらいしか存在しない。

それなのに『ライダー戦争』と言われても、意味不明だろう。

（もしかして、ベルトを賭けてバイクでレースでもするのか？　いやしかし——）

そこで遼の思考は停止される。

なぜなら、下の方から「助けて！！」と言う、明、の声がしたからだ。

「あ、明！！」

遼は直ぐさまに教室の窓を覗き込む。

覗き込んだ遼の視界にはグラウンドと――

「く、来るな化け物！！」

遼は直ぐさまに教室の窓を覗き込む。

覗き込んだ遼の視界にはグラウンドと――

「く、来るな化け物！！」

「ギギギギギイイイ」

「来るなあああああ！！」

逃げ惑う明を追い掛ける様に、全身が少し緑がかってて、両手はかまきり螳螂の様な鎌になってある化け物が入ってきた。

「あ、明！！」

遼は直ぐさま教室を出て、グラウンドに向かおうとする。

しかし、遼は直ぐに悟る。

（今、俺が出て行って何か出来る事は……ないッ！　クソッ！　明

！！！）

そう、遼には何の力もない。

——今まで、の遼なら。

（……確かに、俺には何の力もない。でも、力がなくちゃ友達に手を差し出せないなんて誰が決めた！？ それは第三者が勝手に言ってる事だ！！ なら俺は——）

遼は気付かない。

今、遼が右手に持っているベルトは強く光り輝いている事を。

（——明を助けるために、手を差し出す！！）

遼が自分の心にそう決めると同時に、遼の頭の中に映像が流れ始める。

その映像は、前にこのベルトを使って戦った『火野映司』の戦いの記録。

（……この人も、誰かを助けるために、守るために戦ったのか。：

…そして、これがライダー……仮面ライダー^{オース}○○○！！）

そう思うと、遼は映像で見た通りにベルトを腰の位置に持って来る。

すると、ベルトから何かが伸びて腰の位置で固定された。

右腰の方には円盤を連想させる形をしたスキャナーみたいなものが現れる。

遼はそれを確認すると、2枚のメダルを両端に入れ、最後に真ん中に入れる。

そして、右手でスキャナーを取り出すと同時に左手でベルトの左の方を下に押す。

その行動により、ベルトの長方形の所は斜め左下に傾く。

右手に持ったスキャナーでメダルを読み取るため、斜め右上から右手を斜め左下にベルトの前を通る様に降ろす。

左手は、右手に対を成すように右上に上げる。

「変身！！」

遼は、そう叫ぶと右手を右胸の位置まで持って行き、左手を左腰

まで持ってくる。

《タカ・トラ・バッタ!》

すると、音声になり音声に連動して遼の前にはメダルが巨大化され現れる。

《タ・ト・バ。タトバ、タ・ト・バ!》

音声が為り終わると、巨大化したメダルは遼に向かって来る。

遼はそれを避けようとせず、素直に受け入れる。

一瞬、辺りが光に包まれるとそこには、遼ではなく一人のライダーが立っていた。

「……これが、OOO! 今行くぞ、明!」

今度こそ、少年は助けに行く。

大切な友達を守るために、その身を戦いに投じて。

『仮面ライダーOOO……宮村遼か。……さて、次は誰がライダーになる?』

そこにもう青年はいない。

第一幕（後書き）

感想待ってます！

第二幕

「うおおおおおお！」

遠、もといオーズは雄叫びを上げながら窓からグラウンドに向けて飛び降りる。

もともといた教室が3階なので、普通なら足を痛めたりするだろうが、今はオーズになっているためそこまでの衝撃はなかった。

グラウンドに飛び降りたオーズは、蟷螂の形をした怪物に向けて思いつきジャンプキックをする。

「ギャアッ」

ジャンプキックをくらった化け物は、思いつきぶっ飛び、近くにあったゴミステーションにぶつかった。

「えっ？」

「早く逃げるー!!」

「えっ？ えっ!？」

「早く!!」

「は、はい！」

オーズがそう叫ぶと、明はオーズに背を向けて走り出す。

「よし……後はこいつを倒すだけだ!!」

オーズがそう言うと、化け物はゴミステーションから起き出す。

「ガLLLLLLLL」

「あれ？ ……何かキャラ変わってない？」

確かに、さっき見たときは蟷螂の姿だったのに、今はまるで獣の様になっていた。

「ガァァァァァ」

「どういう事なんだっ!？」

「ギャァァァァァ」

「ガァァァァァ」

「……ああ、2体いたってことね」

遼はそう言う足が震えだす。

しかし、それは当たり前のことだった。
なにせ遼はつい先ほどにライダーの力を手に入れたばかりである。

そしてこれが初のバトル。

バトルと言っても、生易しいものではなく、命のやり取りをするもの。

そして、負けはそのまま・死・を意味する。

その状況下で、相手は2対もいるのだ。
ビビらない方がおかしいのである。

「くっ……くっそおおおおおおお!!」

オーズは叫びながら2体いる相手に突っ込んでいく。

しかし、相手もバカではないため、真正面から突っ込んでくるオーズに対して、右ストレートと左ストレートをオーズの腹の部分に繰り出す。

「ぐはっ!!」

オーズはその攻撃をもろに喰らうと、後ろにのけぞる。

そして、化け物たちはそのままオーズにミドルキックを繰り出す。

「ギイッ!」

「ガルッ!」

「ッ!? そう何度も喰らってられるかよッ!!」

オーズはその2対のミドルキックを繰り出す前に、自分から後ろに飛ぶ。

「「グギャッ!?」」

そして、お互いのミドルキックは標的を失い、そのままミドルキックはお互いの足に当たった。

……この場合はローキックとなるのか?

「知るかよ!!」

と、オーズは誰かにツッコむ。

「って、そんなことを言っている場合じゃねえ!」

そう言ってオーズは、左側にメダルを入れてあるケースみたいなものに気がついた。

「……映像の中では、ここにメダルは入ってなかった」
昔のオーズ——『火野映司』には『アंक』と言うパートナーがいた。

しかし、今のオーズにパートナーはいない。
（だからこそ、このメダル入れにはメダルが入っていてもおかしくない！）

そう考えたオーズは、ベルトの左側についてあるメダルケースを開ける。

中には2枚の赤いメダルが入っていた。

「これって……」

そう言つと、両手でメダルを手取る。

オーズは先程の映像の……『火野映司』の最後の戦いを思い出す。
彼が最後に使ったメダルは、鳥の——彼のパートナーである『アंक』のメダルコンボ。

すなわち『タジャドルコンボ』である。

そして、オーズが今持っているメダルは——

「タジャドルコンボ……」

これは偶然なのか必然なのか。

そう。オーズの初のコンボは『タジャドル』であった。

（いや、厳密に言ったら最初のコンボはタバコンボなんだろうけど）

オーズがそう考えていると、化け物達はオーズに襲い掛かる。

「ギャアアアアアッ！」

「ガルアアアアアアッ！」

「邪魔だー！」

しかし、オーズはそう言い切ると両手に持ったメダルを一度ケースに直すと、両手の先にトラの爪を出し、2体を切り裂く。

「ギャアッ!?」

切り裂かれた化け物達は、そのままオーズの後ろ側に倒れ込む。
オーズは、直ぐさま化け物達の方に振り向き、少し距離をとる。

（……多分、このコンボを使って、始めて『オーズ』になれるのかもな）

そう考え着いたオーズ、もとい遼は、もう一度心に刻み込む。

俺は、友達を——大切な人を——助ける為にこの力を使う！

「行くぜ、化け物共！！」

オーズはそう言い切ると、一度閉まった2枚のメダルを取り出す。
オーズドライバーの左2枚を外しながら、傾けていたのを普通の状態に戻す。

そして、外して空っぽになった2個のスロットに、新たにメダルを入れる。

「……俺は……俺は！」

そのまま変身した時のように、右手でスキャナーを持ちつつ、左手でドライバーを傾ける。

今度は右手だけを動かして、ドライバーをスキャンする。

《タカ、クジャク、コンドル》

「オーズになるんだ！！」

《タ〜ジャ〜ドル〜》

音声になり、オーズは鳥をモチーフにしたタジャドルコンボへと変身を遂げる。

『がんばれよ』

「えっ！？」

タジャドルに変身した瞬間、――遼――は『火野映司』の声が聞こえたような気がした。

（見ててください『火野映司』さん！俺流のオーズを！）

こうして、この世界に『火野映司』の遺志を継いだ、――本当――のオーズが誕生した。

『なるほど。オーズは更なる進化を遂げたか……』

青年は目を瞑っているだけで、その情報が頭の中に入ってくる。

『にしても、まさか前のオーズとリンクするなんてな。コイツは面白い結果だ』

そういつて、青年はまたどこかに去っていく。

『そろそろ、他の地方でも続々とライダーが生まれていつている…

…これからが、シヨーのはじまりだな！』

青年は、笑いながら姿を消していった。

第二幕（後書き）

感想、待ってます！

第三幕

「はあっ！」

タジャドルへと変化したオーズは、そのまま化け物に対して走り出す。

その頃には、倒れこんでいた化け物達も立ち上がってオーズに対して攻撃を繰り出そうとしていた。

しかし、オーズはその攻撃を華麗にかわしてカウンターを繰り出す。

「ギイツー!？」

「ギヤアツ!？」

「はっ! はあっ!!！」

そして、その勢いでオーズは化け物たち2対に対して圧倒的に攻めていく。

「だりやあっ!!！」

「ギイツー!？」

オーズは、ここぞとばかりに化け物たちに懇親の一撃を与え、化け物たちを後ろへと吹っ飛ばした。

「さあ、これで決まりだ！」

そう言うのと、オーズは左手についてあった円盤のような形をしたタジャスピナーの蓋を開け、ドライバーに入っているメダル3枚を、スピナーの中にあるテーブルの窪みに入れる。

その後、蓋を閉じてスキャナーでスピナーを手の甲辺りで止める。すると、テーブルが回りだし音声を発する。

《タカ、クジャク、コンドル。ギガスキャン》

音声がそう鳴ると、スピナーは炎を纏った。

「はあああああっ！」

オーズは、そう意気込みながら腰を落としつつ左に回し、上半身も左側に向ける。

「せいやあああああ！」

そこからオーズは叫びながら上半身を真正面に向けると、右手を右側に思いっきり伸ばし、左手を拳を突き出す形で前に出す。

すると、炎を纏っていたスピナーから赤いエネルギー波が化け物たちに向かって放たれた。

「ギヤアアアアア！」

エネルギー波は化け物たちが逃げる前に化け物たちへ当たり、化け物たちは断末魔と共に消え去った。

化け物たちが消滅すると、そこには2枚のメダルが落ちていた。

オーズはそのメダルを不思議に思っ、メダルに近寄りメダルを拾う。

「……これって、チーターとカマキリのメダル？」

こうしてオーズは、初の戦闘で2枚のメダルを手に入れるという戦果を上げた。

「………終わった………のか？」

「まだ始まってすらない」

「っ！？」

オーズが呟くと、答えがすぐに返ってきた。

返答が帰ってきたことにオーズは辺りを警戒した。

辺りには、一つの陰があった。

その陰はこっちへと向かってくる。

「お、お前は誰だよ？」

「私は、ライダー」

オーズの質問にその陰は即答する。

「ライダー……」

「そう。そして、私がライダーだと言うことは、この後はどうなるか分かっている？」

「……戦争」

そう。この世界はもう普通の世界ではない。

なぜならこの世界には『ライダー戦争』と言うものがあるから。

「よかった。なら——」

陰はオーズに向けて走り出す。

「——ここで死んで！」

「っ！？」

陰がこちらに来るにつれて、オーズは相手の姿を目視できるようになった。

が、そのときに不思議な音声が届いてくる。

《MACH》

そう音声が聞こえてくると、相手は既にオーズの懐に入り込んでいた。

「なっ！？」

「遅いっ！！」

相手は剣でオーズを切り上げた。

「がはっ！？」

「まだ終わらない！」

切り上げた瞬間、相手は剣の柄の辺りからカードホルダーを半円状に開き、その中からカードを一枚取り出す。

取り出したカードを相手は剣へと読み込ませる。

《SLASH》

オーズはその音声が鳴ると、視界の中に入っている剣が光っているのを見た。

そして本能的に感じた——疲労している今、あの剣を喰らうとヤバい事を。

「っ！？」

「これで、終わり！！」

「間に合ええええええっ！！」

オーズは、剣が自分に当たる瞬間に後ろに跳ぶ。そして、そのまま後方へと羽根を広げ飛び立つ。

「に、逃げるな！！」

「逃げるわっ！！」

コントみたいな会話を済ませると、オーズはその場を後にした。
この時オーズは、今までの相手をしていたライダーの姿を今始めてちゃんと見た。

そいつは銀色のボディをしており、頭は尖んがっていた。
……しいて言うなら、頭はランプの『スピード』の様な形をしていた。

「あんにやろう……っ!？」

飛んでいると、オーズは腹部に痛みを感じた。

そう。あの時の攻撃は、完全に避けた様に見えて実は少し掠っていた。

その痛みがオーズの飛行バランスを崩し、ビルの路地裏へと落ちて行った。

路地裏へと落ちたオーズは、変身が解けて遼の姿へと戻った。

「はあはあ……痛え……」

遼は痛みがする腹部に右手を添え、その手の平を見た。

「……まあ、少し血が出てるぐらいか」

その手の平には少しの血がついていた。

「つてく、この傷……病院にでも行くかな」

遼は、路地裏から家の近くにある病院に向かった。

病院に入った遼は、医者に適当なことを言って傷を治療してもらい、家に帰ってそのままベッドにダイブして眠りについた。

さてさて、これで遼の初のバトルの物語は終わりとなる。

この先の遼の運命はこの出来事によって180度変わっていくだろう。

果たして遼はこの先の戦いを生き残ることが出来るのか。

それは――

『くつくつく。ようやく面白くなってきやがったな!』

青年は高笑いをする。

『各地でライダーもどんどん覚醒してやがるし、どんどん戦いが始まってやがる！ 最高だぜ！ もっと俺を楽しませろ！』
はたして、この戦争を勝ち抜くのは一体誰なのだろうか――。

第三幕（後書き）

感想、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667w/>

仮面ライダー×バトルロワイヤル＝終焉！？

2011年9月26日03時00分発行